

## 風変わりな少女「小公女」の変遷 —若松賤子から伊藤整まで—

Transformation of “Queer” (the otherness in) Little Princess:  
Transition of Shokojo from Wakamatsu Shizuko to Itoh Sei

種 田 和加子

はじめに

前田愛著「子どもたちの時間—『たけくらべ』試論—」(1976.6「展望」)の序章では、明治24年に刊行がはじまった博文館の「少年文学」シリーズについてこれらが「歴史」・「伝記」・「史伝」に偏っており、明治国家の目指す「小」国民への激励のメッセージが濃厚であることと同時に、「童話」の少なさが指摘されている。その童話にしても巖谷小波の創作「こがね丸」はゲーテ「ライネッケフックス」と「八犬伝」の焼き直しで、紅葉の「二人むく助」はアンデルセンの翻案、眉山の「宝の山」は寓意的な立志譚で、空想的な世界がいかにも貧しいと前田はいう。想像力をはたらかせる読み物としてむしろ、ジュール・ベルヌの科学小説や「佳人之奇遇」などの政治小説、幕末の草双紙が、受け入れられたとも書かれている。よく読まれたというベルヌの作品「二万里海底旅行」(鈴木梅太郎訳、明治13年)「英国太政大臣難船日記巻之一」(井上勤訳、明治17年)「地底旅行」(三木卓一・高須治助訳、明治18年)、また有名なソフト「ガリバー旅行記」も明治13年に翻訳されている(片山平三郎訳)。これらの翻訳が教訓的な少年文学と混在して当時の少年(や大人)の前にあったわけであり、翻訳か創作、あるいは翻案の区別なく享受されていたといつてよいだろう。「少年」を冠した雑誌が「少年園」(明治24年)をはじめとして続々と創刊される明治20年代には、いまだ、「少女」文学は成立していなかった。明治の翻訳家、作家、教育者として知られる若松賤子(1864年—元治元年—1896年—明治29年)は「小公子」の訳業(「女学雑誌」明治23~25年、原著1886年)で名声を高め、ほどなく、「小公女」の原型である「セイラ、クルーの話。一名ミンチン女塾の出来事。」(Sara Crew, or What Happened at Miss Minchin's, 1888, 以下“Sara Crew”と略す)の翻訳を「少年園」に連載した。なお、すでに指摘されているが幸田露伴の弟である歴史学者幸田成友は「巨浪」名で「少年文庫」に「姫百合」と題して若松と同様原作“Sara Crew”の文語体による翻訳を載せている。(明治23年9月)これは未完である。読者の立場としては、創作・翻訳・翻案の別なく、また発表媒体が「少年」対象であっても、ジェンダーにこだわらず受容できる。その観点にたてば、若松が全訳した“Sara Crew”が、近代文学にもたらされた最初の「少女文学」であるということにためらいはない。本論では若松訳を唯一の全訳とする“Sara Crew”すなわち「セイラ、クルーの話。一名ミンチン女塾の出来事」(原「小公女」、以下「セイラ、クルーの話。」と略す)を起点とし、菊池寛、伊藤整、川端康成・野上豊一郎ら多くの著名な作家によって翻訳さ

れた「小公女」の変遷を、とくにその訳語からみるジェンダー性および、階層性に注目して考察するものである。その際、ポスト・コロニアリズム批評、英米児童文学の研究成果、また、日本児童文学における研究の蓄積に留意し、可能なかぎり、「小公女」の翻訳の広がりをおさえたいと考える。

## 一

まずはじめに 若松賤子訳「セイラ、クルーの話。」の底本に関し、ある程度絞られた点を記載する。そのうえで、若松の翻訳と原文を対照させて考察し、この翻訳と「着物の生る木」（「少年世界」明治28年9月15日、一般に最初の少女小説といわれる）や「おもひで」（同明治29年1月・2月）など若松の創作童話との関係に言及する。「セイラ、クルーの話。」は「少年園」に明治26年～27年にかけて連載された。原著者 Frances Hodgson Burnett (1849～1925) による“Sara Crew”は「セント・ニコラス誌」(serialized in St.Nicholas magazine)に1887年12月から翌1888年1月、2月と3パートに分けて掲載され、同年に New York, Charles Scribner's sons 社より、セント・ニコラス版と同様、Reginald B. Birch (1856～1943) の挿絵入りで出版された。単行本化にあたって、セント・ニコラス版と同様、7枚の挿絵がある。若松はセント・ニコラスでも読んだであろうが、<sup>1</sup> 底本はこの Charles Scribner's sons 社版であると暫定的に考える。その理由であるが、挿絵をもとにした場合でも決めに迷うゆえである。同1888年に Sara Crew, or What Happened at Miss Minchin's と Edhitha's burglar が一冊になったものが、挿絵家も同じで、London の Frederick Warne and Co. より出版されている。この版では、挿絵はセント・ニコラス、ニューヨーク版がいずれも7枚の挿絵であるに比して4枚増え11枚となっている。なお、セント・ニコラス版のパート2のはじめにかかげられた挿絵と（図1）ロンドン版は同様で、背景にロンドンの街の煙突屋根が描かれているが（図2）、ニューヨーク版は、その背景をとって、テキストもついていない。<sup>2</sup>（図3）若松の翻訳の最終回（明治27年4月18日）に一枚だけ原画が挿入されているが（図4）、ニューヨーク版（8ページ目）からとられたものではないかと思う。<sup>3</sup> なお、「セイラ、クルーの話。」に先立つ「小公子」も Scribner と Warne の双方から出版されており、川戸道昭氏が挿絵の配列順を手掛かりに調査し、前者を底本としている。「セイラ、クルーの話。」の

- 
- 1 「女学雑誌」第39号、(明治19年10月25日)に「妾が読み見て宜しき者と考へ候西洋の小説」として「若松しづ」の名であげた12冊のなかに、Little classics, St. Nicholasが入っている。
  - 2 セント・ニコラス Hathi Trust Digital Library v.15No 1887—Apr 1888 Original from University of Michigan pp. 97～260  
 ニューヨーク版 University of N.C.at Chapel Hill Digital  
<https://www.archive.org/details/saracrewweorwhathburnett/>  
 ロンドン版 Hathi Trust Digital Library Original from University of Wisconsin—Madison  
 上記のサイトより閲覧可能。
  - 3 「復刻版 明治の児童文学」翻訳編 第三巻 バーネット集、1999年 五月書房

場合、ロンドン風景の背景や、キャプションを削除すれば、同じ画像になるので、決定はできないのである。なお、ロンドン、Warne 版は、セント・ニコラスに掲載されたパート 1、2 を章立てに踏襲し、パート 3 は、2 と合体させている。



図 1 St. Nicholas



図 2 Warne



図 3 Scribner



図 4 「少年園」

若松は、全16回にわたって翻訳を掲載しており、二回目から「二の上」とあり、「六」章は一〜三回という構成で、Warne 版の章立てには準じていない。

ただし、現在国立国会図書館の近代デジタルライブラリーで閲覧可能な「英和对訳セーラ・クルー物語」（若松賤子訳 木下祥真編輯 東京内外出版協会、明治37年10月）はパート1、2<sup>4</sup>に分かれたロンドン版であり、一枚の挿絵が掲載されている。それは、ロンドン版にのみに附されたものである。場面として、「Sara made a little bow, "Excuse me for laughing, if it was impolite"」（笑つて失礼でしたら、御免下さい。）に相当する。

なお、本作に先立つ「小公子」が膨大な研究の蓄積をもつのに比して、「セイラ、クルーの話。」はいわゆる同時代評もなければ、このように底本も詮議されていない現状である。つまりは、「小公子」、それが属する少年文学を最優先してこれまで研究されてきたということだろう。昭和2年に、「児童劇小公女」<sup>5</sup>を訳した久保田万太郎は、その「序」で自らが「小公子」に魅せられた一人であると述べ、さらに「…同じ著者に「忘れかたみ」といふ短編集のあることを知ったわたしは、…やうやくのことそれの古本を一冊みつけることができました。——が、それは、そのなかの「セーラ・クルー物語」一つを読みえたことで、わたしは、その日の骨折りを取返すのに十分だった。わたしは涙を流して興奮した。…」と書きつけている。これが、久保田がバーネットの「小公女」の戯曲を翻訳しようとした契機であった。なお、桜井鷗村編「忘れかたみ」（文武堂）は、明治36年3月の出版であり、「セイラ・クルーの話。」は「せーら、くるー物語」として「少年園」連載開始から10年経過してやっと単行本に収録されている。「家庭の天使」を描いた「小公子」が明治23年8月23日から「女学雑誌」に連載されるや大評判となり、翌明治24年10月28日に前編が女学雑誌社から刊行され、翻訳王森田思軒らの激賞をうけたという扱いとはまるで違っていたことを物語る。<sup>6</sup>

水村美苗は「日本語が減びるとき」（2008年ちくま書房）のなかで、19世紀の世界の公用語はフランス語であり、第二次世界大戦後その地位は凋落し、いかにして英語が覇者となってきたか、ということをも「第二章 パリでの話」のなかで書いているが、フランス語が輝かしい位置にいた例として「小公女」の中の「フランス語の授業」をあげている。水村は「小公女」を小学校低学年むき、「若草物語」や「あしながおじさん」に行く前の物語で、映画化などもされてきており、だれでも知っている物語、として紹介している。実際、現在でも巷の小規模な書店に、必ず少女マンガ風「セーラの物語」（角川つばさ文庫など）のような翻案の物語は存在する。そして、水村の

4 セント・ニコラス、ロンドン版の各章の出だしは、part II, That very afternoon Sara had an opportunity of proving to herself whether she was really a princess or not. (若松四の上) part III, Sara could not even imagine a being charming enough to fill her grand ideal of her mysterious benefactor. (若松五の一)

5 丸善、昭和2年6月

6 収録されている作品は、「忘れかたみ」ほか、「雛嫁」「せーら、くるー物語」「着物のなる木」「おもひで」など、翻訳、創作を含め、22編。

体験をはるかにさかのぼっていくと、若松訳「セイラ・クルーの話。」にいきつのである。若松が翻訳、創作した作品のなかでも、普遍的な少女文学の一つがこの作品である。<sup>7</sup>

“Sara Crew”は、登場人物やエピソードは「小公女」より簡略化されている面があり、「原小公女」というべきもので、バーネットはこれを戯曲化して上演したところ、好評だったため、さらに作り変えて現在流布する（新）「小公女」“A Little Princess, Being the Whole Story of Sara Crew Now Told for the first time”（1905）を出版した。若松とバーネットは同時代人といつてもよいが、若松は明治29年（1896年）に死去しており、“A Little Princess”の翻訳を手掛けることができなかった。

「セイラ・クルーの話。」には、「小公女」における「ダイヤモンド鉱山」をめぐる話や、セイラの誕生日祝いの最中に父親の訃報がきて境遇が激変するなどドラマ性はなく、セイラを敬う下働きの少女ベッキーなどは出てこないし、分量的にも短い。しかし、登場人物が少ない分、セイラの性格の強さとミンチン先生との相容れなさが際立つ。セイラの年齢は10歳から14歳までの期間が描かれ、冒頭はセイラの回想が入り混じっている。（原作では8歳から12歳までの設定である。）若松は作品の舞台である学校“MISS MINCIN'S SELECT SEMINARY FOR YOUNG LADIES”を「ミンチン女塾<sup>8</sup> 特に貴女の需に応ず」と訳すなど当時の日本語の文脈に合わせて訳し、あわせて異国の空気もともに伝えている。

目黒強はこれまでに若松訳“Sara Crew”を論じた唯一の論文の著者であり、若松の翻訳からみられるセイラの従順でない性格に注意して、1890年代に浸透してくるいわゆる良妻賢母規範に添った少女像に「収まらない」面に注目している。（『国文論叢』2007、神戸大学国語国文学会）わたくしはこの論の趣旨をふまえて考察するが、「セイラ、クルーの話。」よりセイラの一風変わった（queer, odd, quaint）印象を与える描写と感情の激しさ、従順でない少女像を抽出しておく。伊藤整訳「小公女」も比較のため記す。

She was a queer little child, with old-fashioned ways and strong feelings, and she had adored her papa…セイラは全体、一風変わった兒で、仕たり言つたりすることの中に、当世向でないことが多くあり升た。感情は極く強い方で、父ほど好い人は

7 若松は次のようなアメリカ児童文学の翻訳を手がけている。ペイスン・ブレンティス：The Flower of the Family（1853）『女学雑誌』、『児籃』欄「わが宿の花」全28章のうち8章まで訳し、中断。明治26年9月から『児籃』欄、ケイト・ダグラス・ウイギン：The Bird' Christmas Carol（1887）、『いはひ歌』明治27年警醒社より刊行、いずれも少女が主人公。『いはひ歌』と同時期に『少年園』『文園』欄に連載されたのがSara Crew。尾崎るみ「若松賤子と英米児童文学」（『キリスト教文学研究』26号2009年）ブレンティス、ウイギンの代表作はそれぞれStepping Heavenward, 1865 Rebecca of sunnybrook Farm, 1903 この研究をふまえ、「小公子」との対で、バーネットの代表作の一つとして、記憶されるものとしてSara Crewをあげておく。

8 藤井白雲子訳「ミス・ミンチン 女子修養塾」（明治43年）伊藤整訳「ミンチン女史 神聖女子学校」（1940年）畔柳和代訳「ミス・ミンチン 女子学院」（2014年）

ないと思つて居り升た。

She had never been an obedient child. She had had her own way ever since she was born, and there was about her an air of silent determination under which Miss Minchin had always felt secretly uncomfortable.

セイラは決して従順な兒では有ませんでした。生れた時から氣儘一杯をさせつけられて居升たし、沈着いて居る中に、なんとなく、氣丈な処が有升たから、流石のミンチン女史さへ、内心、薄氣味わるく感じて居り升た。

“Stay,” commanded Miss Minchin, “don’t you intend to thank me?”

Sara turned toward her. The nervous twitch was to be seen again in her face, and she seemed to be trying to control it.

“What for?” she said.

“For my kindness to you.” replied Miss Minchin. “For my Kindness in giving you a home.”

Sara went (made) two or three steps nearer to (toward) her. Her thin little chest was heaving up and down, and she spoke in strange, unchildish (unchildishly fierce way) voice.

“You are not kind.” she said. “You are not kind.” (and it is not a home)

( ) 内、A Little Princess, 1905

コレ、おまち！おまへは一言の礼もいはずに、行くのか？

セイラが、女史の方へ向けた顔に、以前の引釣が、また見へ升たが、今度は、それを自ら制して居る様子でした。さうして、

なんのお礼？

と尋ね升た。

わたしが親切にして上ることに対してゞではないか？ お前をこゝへ置いて上げる親切に対してです。

セイラは二歩、三歩、女史の方へ進み升た。セイラの小さな胸は畳まつたおもひで、眼に見へるまでに、立騒いで居り升た。さうして、子供の声ともおもへぬ、妙な声色になつて、

あなたが深切なもんですか、あなたが……深切なもんですか。

〈伊藤訳、昭和15年〉

『待ちなさい！』とミンチン先生が言つた。『私に礼を言はないの？』

サアラは立ち止つた。すると、不思議な深い物思ひが、一度にどつと胸にわき立つた。

『何のお礼でせうか？』とサアラが言つた。

『私がしてあげた深切の礼よ。お前の住む家を興へてやつた礼ですよ。』

サアラは二三歩先生の方に近寄つた。サアラの小さな瘦せた胸は高まつたり下がつたりしてゐた。そしてサアラは妙な子供らしくない鋭い声で言つた。

『先生は親切でなんかありません。親切でもありませんし、ここは家でもありません。』

若松訳の場合、ミンチン女史の言葉が「男性」風で、セイラもかなりはっきりもの言う子供である。<sup>9</sup>

若松の翻訳より以前、三宅花圃の「藪の鶯」（明治21年）で、女学生言葉のはしりのような「てよ」「だわ」言葉をむしろ蓮っ葉な言葉として使わせていたが、一般に「女性」らしさを表す女性言葉の標準的なものは小説世界のなかでいまだ出来上がってはいない。若松訳のミンチン先生は丁寧な物言いとしては「存じ升よ」「ムりませう」と言っており、またセイラは自己問答するときは「考へてやるの」「強ひ心持がするんだわ」「かもしれないよ」というように、女の子らしさは表れている。苛酷なミンチン先生は一貫してセイラに対し、「おまへ」と呼び、声を荒げたときは「ナニ、おまへのだと、何をいつているんだ！」など必ず女性性を脱した言葉遣いとなっている。

女性徒アーメンガードは、「でも、あたしは出来なくつてよ」（三の上、第120号）と「てよ」言葉を使っているが、これは、若松訳では例外的である。また、フランス語の教師はセイラを評して「アノ、クルーッていふ少さいのネ…キット大したものになり升よ」（第一回）と「小公子」で試みられ、森田思軒が感心したという「俗語」（キット、大したもの）が会話文に用いられている。自然な口語体を編み出す若松の翻訳の成果はいかなく発揮されているといえよう。

引用したこの箇所からはセイラの性格の強さとともに「従順でない子供」性もはっきりうちだされている。A little Princess: Gender and Empire, (New York 1996) を書いた Roderick McGills によれば、Sara（セイラ）には「ジェーン・エア」（Jane Eyre Charlotte Brontë 1847年）が濃厚に影響していることが指摘されている。<sup>10</sup> たしかに、想像力豊かな少女で、孤児であり、学校（あるいは孤児院）文学<sup>11</sup> である点はジェーン・エアと共通し、意志的な、当時の基準ではかわいらしくないジェーンが伯母と相容れない点はセイラとミンチン先生の関係に通じるといえる。<sup>12</sup>

9 Sara Crew の原文は、G.P. Putman's Sons, New York, 1981による。  
若松訳は『明治翻訳文学全集』バーネット集、2000年ナダ出版を使用。伊藤整訳は、昭和15年11月「世界名作家家庭文庫」（主婦之友社）初版本による。

10 p.8 著者は、ブロンテがジェンダー問題を鮮明に意識し、バーネットも含め19世紀の女性作家に影響した、と述べている。

11 Sara Crew であれ、17年後に発表された A Little Princess（1905年）であれ、19世紀に開花した欧米文学の「家庭小説」のコード、すなわち家庭をもたない孤児が代理父ないし代理母を獲得し新たな家庭をもつというストーリーをなぞっているとはいえるだろう。女の孤児の系譜としては 家なき娘 En famille 1893年（明治26年）初訳1918年（大正7年）五来素川「雛燕」、翻案、片岡鉄兵『あゝ故郷（こきょう）』という邦題で、また宇野浩二『なつかしの故郷（ふるさと）』という邦題で翻案。さらに、Anne of Green Gables 1908年、出版、戦後（1952年）村岡花子訳、「秘密の花園」（The Secret Garden, 1911年）「あしながおじさん」1912年「小さな孤児アニー」Little Orphan Annie 1924年 Harold Gray など多くの孤児文学がある。

若松は、明治23年4月5日「女学雑誌」の「閨秀小説家答」（207号「雑録」）のなかで「余の平素愛読する小説云々」において、愛読した作家に Charlotte Brontë をあげているので、翻訳の過程で何らかのインスピレーションを受けた可能性はある。

ミンチン先生の虐待は、言葉だけではなく、セイラに食べ物を与えず、飢えさせることに露骨に表れるが、「飢える子供」としてはチャールズ・ディケンズの長編小説で、やはり孤児文学である「オリヴァー・ツイスト」（*Oliver Twist*、1837年から1839年まで「ベントリーズ・ミセラニー」に月刊分載、単行本は1838年刊、邦訳 池の萍（うきくさ）訳者不明 絵入朝夜新聞）の系譜につながるかと思われる。<sup>13</sup> さらにセイラが火の気のない屋根裏で、温かく、食べ物の豊富な部屋を空想するのは、アンデルセン「マッチ売りの少女」（1848年）の飢えからうる幻影も影響しているかとも思える。

目黒論文において、“Sara Crew”と“A Little Princess”の原文の比較が行われ、後者では、ロッチェという母親のないわがままな子供がセイラにだけはなつくこと、また、セイラが父親から「小さなおくさま」（*Little missus*）と呼ばれていることから、「良妻賢母」性を付与されており、「Sara Crew の段階では、相対的にせよ、良妻賢母的な女性像が顕在化していない」、「Sara Crew におけるセイラは当時の日本社会のジェンダー編成から逸脱した少女表象であった」と述べられている。

具体的には「少年園」に「セイラ、クルーの話。」が掲載されている時期、この雑誌の少女をめぐるジェンダー編成は、「良妻賢母的規範から逸脱する少女像に対して排他的である」こと、セイラが、想像力豊かな子供で、ともすればそれが行き過ぎる面があるが、それは小説に惑溺する害を指摘する言説が「教育雑誌」など明治20年代初年から説かれていたことから、セイラのように読書好きがこうじて想像力が磨かれた少女もまた、「少年園」掲載当時の少女像としては肯定されにくいことが根拠である。空想や小説への耽溺に関わることで付け加えたいのは「セイラ・クルーの話。」では、使用人＝House maid の存在とその階層性、彼女たちが好んで読むものが訳し出されていることである。

If she had always had something to read, she would not have been so lonely. She liked romances and history and poetry; she would read anything. There was a sentimental housemaid in the establishment who bought the weekly penny

12 ジェーン・エアはウエブスターの「あしながおじさん」（*Daddy-Long Legs* : Jane Webster 1912年、邦訳 大正8年12月「蚊とんぼスミス」（滑稽小説）東健而 玄文社）にも18歳になるまでには読んでおくべき小説として登場している。なお、少女時代に「小婦人」（若草物語、*Little Women*, 1868）を読まないで育ったのは、学校中で私一人でございます。とある。なお、*Little Women* は若松の推薦書でもある。（前掲注1「女学雑誌」第39号、明治19年10月25日）

13 若松は、「国民之友」（明治25年8月13日）に「雛嫁」の題でデヴィット・コパーフィールドを訳している。ディケンズも若松の愛読する作家の一人、注1、他、「女学雑誌」第207号、明治23年4月5日「閨秀小説家答」若松しづ子の署名で、15、6歳の頃から読んだ作家として Dickens をあげている。



papers and subscribed to a circulating library, from which she got greasy volumes containing stories of marquises and dukes who invariably fell in love with orange-girls and gypsies and servant maids, and made them the proud brides of coronets; and Sara often did parts of this maid's work so that she might earn the privilege of reading these romantic histories.

セイラは何の読物も持つて居りませんか。何か読物さへ有つたら、セイラも、さほど淋しいことはなかつたのでした。…塾に使われている女中の中で、小説好なのが有つて、時々続きものゝ出た小新聞を買つたり、見料を払つて、手垢だらけな小説を借りることが有升た。セイラは、其新聞や、貸本を見せて貰いたさに、其女中の仕事を代つてして遣ることが度々有升た。

セイラが a maid of all work (雑役婦) として扱われ、かつ勉強ができないが気のいいアーメンガードの一種の家庭教師 (governess) でもあるのに比して、このハウスメイドは、安価な週刊新聞の類を買つたり、小説を貸本屋で借りたりしている。メイドにも階層があり、若松は、House maid に「女中」の一語をあて、「ロマンチックな物語の類」に「続き物」をあてるなど、後期ビクトリア朝社会の使用人文化を参照できるようにしている。とにかく一時的に零落したセイラは、使用人のなかで読まれる通俗的な物語にもふれており、これはのちの“A Little Princess”には出てこない要素である。セイラがアーメンガードに、読んだ本の話を開かせる態度に母性的なものを見ることができるとしても、使用人としてのセイラも映し出そうとした若松の意図も併せて意識しておきたい。なお、the weekly penny papers というのは、労働者階級の女性のための 1 ペニーの週刊読み物で、“The Princess's Novelettes”や“Bow Bells”、“Family Herald”などがあるという。それらに掲載されたロマンス小説が「教育的でない読み物」として、有害視されたということが、“The Princess's Novelettes”復刻版の監修、解説を手掛けた川端有子によって指摘されている。<sup>14</sup> 明治20年代のはじめから小説に耽溺することの害を説く言説は、目黒の検証による通りだと思うが、とくに中流階級の女子の保護という名目で良妻賢母主義の見地から女子と小説との関係が危機感をもって語られたこと<sup>15</sup> はイギリスと日本とで、ほぼ同時並行的である。

原著である“Sara Crew”それ自体が、閉鎖的な学校、屋根裏部屋、異常なまでに高圧的な教師、突然の主人公の運命の変化、など同時代のロマンス小説にあるゴシック・ロマン的な要素を兼ね備えており、ジェーン・エアにも十分その要素があることについては、原著の「ジェーン・エア」受容・翻訳が大衆的な人気を得て流布していく要因としてあらためて考察すべきことだろう。すでに宗意和代氏の博士論文はそこにコ

14 2017年1月 Eureka Press

15 たとえば、「女鑑」第二号 明治24年9月、落合直文「女子社会に望む」の論説の中で「淫奔無頼の小説」の流行に女子が取り込まれることを警告している。

ミットしている。(注22参照)

考察の最後に、目黒論文の第四章で「セイラの系譜」として、若松の創作童話と、セイラ像との関係にふれられていること注意しておく。

目黒が取り上げているのは、「黄金機会」(「女学雑誌」1893年4, 5, 7月)、「小遣い帳」(「少年世界」1895年10月)「着物の生る木」(「少年世界」明治28年、1895年、9月)である。「黄金機会」と「小遣い帳」からは孤児への「慈しみ」をもつ少女とセイラを重ねている。なお、山本紀久子によって、「黄金機会」は、ジーン・インジロー (Jean Ingelow 1820～1897) の翻案であることが明らかにされている。(若松賤子の翻訳業績—翻訳・翻案・創作作品の研究)<sup>16</sup>

そのうえで、上記2作品にはたしかに、セイラ的な要素がある。しかし、これらの作品が教訓的な面に終始するのに対し、「着物の生る木」は、「裁縫が嫌い」な少女を前面に出した点で、画期的である。目黒も引用する久米依子<sup>17</sup>のいう、「禁止と誘惑」の物語内容は、たんに教化的な話として出来上がってはいない。しかも、婦徳の絶対条件である「裁縫」を嫌う少女が、あらゆる衣装がそろっている国に一時的にも行くことができ、知恵を働かせて日常に帰還する、まさに越境の物語である。若松は、「文学会序」(英文、明治22年11月、掲載時「附録女学」明治23年12月6日)で、江戸の漢詩人紅蘭が「縫緘余事」(文学は家事の余暇に行う)といった心がけを手本とせよといった、夫巖本善治の社説(明治20年2月17日「女学雑誌」98号)をユーモラスにとりあげて、女性はその能力に合わせて仕事をすべし、といった進歩的な一文を草していた。

あるいは、その前年1887年11月に、バツサー女子大学に書き送った“The Condition of Woman in Japan”(「女学雑誌」98号、明治21年2月25日)のフェミニズム意識の高さなど思いあわせても、若松が「裁縫」に女性が縛られることをよいと思ったというふしはない。「着物の生る木」の少女なつ子は、一度は婦徳に背いたことが重要だ。裁縫のない、悦楽の国は、セイラが屋根裏で体験した魔法の世界と同質であり、セイラが父親から大変な贅沢を味わわせてもらったことなども、なつ子の世界にはよぎる。と同時に、良妻賢母規範は、そうした逸脱を許容するようにみせかけて女子の内面を縛る巧妙な装置である。もっとも、1990年代からポスト・コロニアル文学の面から考察されてきた原著の“Sara Crew”も、亡き父親の友達に見出されたあとは、それまでの風がわりなアングロ・インディアンというよりは、大英帝国が期待するプリンセス像に沿っていくので、教訓・規範めいたもので締めくくられるのは、若松作品とそう違いはない。<sup>18</sup> 童話や、家庭小説の決まり事は手ごわい。

16 日本女子大学大学院人間社会研究科紀要 2006年12号、イリス作品「オリスの物語」中、“The Golden Opportunity”の翻案と指摘されている。

17 「少女」小説の生成 青弓社、2013年、p90

18 川端有子「インド／フランス／イギリス／—「小公女」における文化の多義性」、Tinker Bell, イギリス児童文学会、Vol 46.2001

創作「おもひで」も、欧化主義に一時はかぶれた妻が、その軽薄さを後悔して娘に語る話だが、母親が「洋装」、「舞踏」など鹿鳴館文化がもたらした欧化主義の魅惑を全面的に否定できないからこそ、「おもひで」として語る。久米論文でいわれるように「＜教訓＞をかいくぐって非日常世界が美しく語られる点に＜少女文学＞の先駆的なファンタジー性」が見てとれる背後に、「セイラ、クルーの話。」のセイラの放恣なまでのイマジネーションが揺曳しているし、それは、教訓に徹しきることのない若松の欲望の顕れとみておきたい。

## 二

若松亡き後、バーネット作“A Little Princess”(1905年)は、Scribner社と、Warne社によって刊行された。

その翻訳について、次に主なものを列挙し、菊池寛、伊藤整らの翻訳の検討にうつる。「明治翻訳文学全集」＜新聞雑誌編＞21 バーネット集 巻末の川戸道昭の解説中の「小公女」翻訳史を参考に、若干の情報を補足した。

1910(明治43年)藤井白雲子訳『小公女』、「婦人くらぶ」。10月、『聚精堂』より刊行。坪内逍遙の跋文。原著、Frederick Warne and Co,1905の挿絵が一枚使用されている。挿絵はPiffard Harold(1867～1938)

1924(大正13年)佐々木茂索訳『小公女』 東光閣 挿絵なし、のち1932年「少年文庫」に収録<sup>19</sup>

1927(昭和2年)菊池寛訳『小公女』(「小学生全集」第52巻)と加藤まさを口絵、岡本婦一挿絵 これは「日本児童文庫」と競合し、円本ブームの中での全集出版の潮流にのったものである。

1933(昭和8年)木下小葉訳『小公女物語 屋根裏の王女』(物語化)

1936(昭和11年)水島あやめ著「少女倶楽部」附録、(再話・物語化) 落谷虹児画

1939(昭和14年)水島あやめ編著 世界名作物語『小公女』講談社 加藤まさを画大日本雄弁会講談社

1940(昭和15年)伊藤整訳『小公女』主婦之友社(世界名作家庭文庫)伊藤は「完全訳」と自負しその解説で「小公女」を学校物語として提示している。装丁は恩地孝四郎。原著の挿絵使用。

1948(昭和23年)伊藤整訳 鎌倉書房、昭和15年版と同一。装丁、口絵高井貞二

1953(昭和28年)川端康成・野上彰共訳『小公女』創元社「世界少年少女文学全集(全50巻 1953-1956年9 アメリカ編3)、昭和33年角川文庫、1962年(昭和 37年)

19 藤井白雲子、「少年文庫」収録の佐々木訳にも原画の挿絵が使用されていることは、以下の論文で指摘されている。  
酒井晶代「挿絵に見る『小公女』受容」(2) 研究「子どもと文化」(10)、中部子どもと文化研究会編 2007年4月

「少年少女世界名作全集」13所収

なお、原作の再話のタイプはこの間にもこの後にも多くあり、ここではすべてを網羅したわけではない。

菊池寛訳「小公女」（昭和2年）は自らが企画した「小学生全集」（88巻）のうち、第52巻に収録されている。この全集は興文社・文芸春秋社の共同企画で、初級用、上級用に分かれる。責任編集となったのが菊池と、芥川龍之介である。一冊35銭で発売された。この昭和2年、「日本児童文庫」全70巻（のち6巻）も一冊50銭で発売された。出版社はアルス社、社主が北原鐵雄で、執筆陣には、北原白秋、鈴木三重吉、巖谷小波がかかわっていた。両者の出版の背景と広告などの熾烈な販売戦略、想定された子ども像については藤津麻里が「日本児童文庫」と「小学生全集」（「ユリイカ」1997年9月）で詳細に論じきわめて有益である。概略を記すと、円本と呼ばれる、空前の全集ブームのあおりをうけて企画された両全集は、後者が「日本児童文庫」より、「実用的、大衆的」であるといわれている。それぞれ、20万部売れたという。これらが、主に都市中間階級が購入され、一般的にはその文化住宅の応接間に置かれた。アルス社は、「日本児童文庫」を収納するための「特製」と「並製」の組み立て式書架を各家庭に備えることも宣伝したということで、「子ども部屋」に手が届かずとも、子どものための書架を備えることで、大人達の「ステイタス・シンボル」となる、つまり、藤井は文化的に配慮された子ども観をこうした全集の背後に見ているわけである。

こうしたいきさつで刊行された「小学生文庫」収録の「小公女」の「はしがき（父兄へ）」で、菊池は次のように述べている。

此の『小公女』といふ物語は、『小公子』を書いた米国のバアネット女史が、その『小公子』の姉妹編として書いたもので、少年少女読物としては、世界有数のものであります。『小公子』は、貧乏な少年が、一躍イギリスの貴族の子になるのにひきかへて、此の『小公女』は、金持ちの少女が、ふいに無一物の孤児みなしこになることを書いています。しかし、強い正しい心を持ってゐる少年少女は、どんな境遇にゐても、敢然としてその正しさを枉げない、といふことを、バアネット女史は両面から書いて見せたに過ぎないのです。

『小公子』を読んで、何物かを感じ得られた皆さんは、此の『小公女』を読んで、また別の何物かを得られる事と信じます。（ルビは略した箇所がある）

全集というタイプの読み物に「小公子」「小公女」が収録されるにあたって、菊池のいう両作品の骨子は、それ以降も踏襲されていく内容である。菊池訳は読みやすくなだらかな文章であるが、原文の細部が省略されている。加藤まさをの挿画の中のセーラは、原著のイラストに比べて全体に幼く、可憐な少女で、水島あやめ著「名作物語 小公女」（昭和11年「少女倶楽部」11月号附録）にある落谷虹児の画風と共通する。

しかし、伊藤整（1905年～69年）は、これらの先行する「小公女」の翻訳に飽き

足りなかったとみえる。

「伊藤整全集」第三巻（1973年、新潮社）の瀬沼茂樹の「編集後記」によれば、「作者はこれに先立ち（注 伊藤の童話作品<sup>20</sup>）、昭和十五年十一月二十五日、フランシス・バアネットの『小公女』を「世界名作家家庭文庫」の一冊として主婦之友社から出版し、少年少女向けの童話に関心をもっていた。だから、太平洋戦争の時期に、一時、少年少女小説に筆を染めようと考えたことには、この時代に対する処しかたとして理由があり、この種の作品がこの時期に限られるという特色を示している。」とある。

伊藤の「小公女」の翻訳と、実作品で、直接そのことにふれたものは見当たらないが、昭和15年12月19日河出書房より刊行された「典子の生きかた」には、実科女学校に通う典子が「子供の頃から、西洋流の童話やその挿絵で育てられた少女の着物、それから映画の女優がその物語の情緒と一緒に少女たちに与える美しい扮装への憧れ、そういうものが洋裁の時間に沸き立つのであった。」とあり、「小公女」セーラの原本の挿絵や物語内容が反映しているとも思える。

伊藤の少年少女向けの作品の翻訳はこの「小公女」のほか、戦後、オルコット「若草物語」（少年少女世界名作全集、講談社、昭和37年）「偉人物語り この人を見よ」（未見）がある。少年少女向き読み物の翻訳はけして多くはない。

「主婦之友社八十年史」（1996年）では、「戦時体制一色の時代に、親子で楽しめる世界の名作を集めて出版しようという試みは、出版社としての意気地でもあったろうか。昭和15年10月から翌16年12月までに20冊。<sup>21</sup>『ファブルの生涯』『ナイティンゲール伝』『ロビンソン・クルーソー物語』『小公女』『青い鳥』など、現在でも読みつがれている名作ぞろいであった」と回想されている。ここには列挙されていないが、「世界名作家家庭文庫」には、時代を反映してファンチュリ「国旗掲揚式」や、「ピスマルクの手紙」、トルストイ「兄弟騎兵」など、いわゆる愛国小説なども入っていた。なお、伊藤整訳「小公女」には、「その名を知らぬ人はない「小公女」の日本最初の全訳です。貧しくてもあくまで心清かった少女の美しい物語です」との紹介文がついている。「小公女」に限らず、この文庫の紙質はよくないが、事情の許す範囲で、原著の挿絵がとられていることは、主婦之友社の自負が反映されているとみてよいだろう。

現在のところ、2014年11月に、新潮文庫として刊行された畔柳和代訳「小公女」が最新であるが、翻訳者は伊藤訳から多くを学んだと述べている。

伊藤整訳の功績を一言でいえば、“Sara Crew”のなかで、House maid として少し登場し、“A Little Princess”で、scullery maid、Becky として生まれ変わった、孤児で、

20 全集に収録されている童話は、「童子の像」（昭和18年5月20日「新日本文芸叢書」の一冊）「雪国の太郎」（昭和18年11月21日「小国民文芸選」第十一巻として出版）「3人の少女」（昭和19年2月20日「日本少女小説選」の一冊として刊行、「冬じたく」（昭和22年10月15日、朝日新聞社発行こども朝日編「落穂ひろい」に掲載）

21 実際には「バウル街の少年団」（18冊名）「ロビンソン・クルーソー物語」（19冊目）が最後の配本ようである。調査にあたって藤女子大学図書館司書加藤舞氏にご協力いただいたことを感謝します。

皿洗い以外になんにでも使いまくられる最下層のメイドの コックニーなまり（つづり）を訳したことだろう。この訳で、原作が抱えている使用人の「階層性」（階級制）が明確に出た。

When Sara went into her sitting-room in the morning, she found on the table a small, dumpy package, tied up in a piece of brown paper. She knew it was a present, and she thought she could guess whom it came from. She opened it quite tenderly. It was a square pincushion, made of not quite clean red flannel, and black pins had been stuck carefully into it to form the words, "Menny hapy returns."（正しくは Many happy returns）

その朝サアラが居間に入つて行くと、テーブルの上には、褐色の紙に包んだ小さなふつくらとした包みがおいてあつた、その贈物は誰が持つて来たのか、サアラには見当がついている。静かに開いて見ると、それはあまりきれいでない赤いフランネルの布で作つた四角な針刺しで、その上には黒いピンで、少し間違つた文字で「お目出度う」という字の形を浮してあつた。（伊藤整訳）

…あまり美しくもない赤いフランネルに、黒いピンが「お目出とう」という字の形に並んでさゝつてみました。（文字にはふれていない）（菊池訳）

それに、すこし、まちがった綴りで、「おめでとう」という字が、黒いピンで注意深くさしてあつた。（戦後になっての川端・野上訳）

中身は四角い針指しで、ござっぱりしているとは言いがたい赤いフランネル製だ。黒いピンをていねいに指して「おたんじょびおめでと」という言葉を形作っている。（最新 畔柳和代訳）

なお、畔柳訳は、ベッキーの話しことばを、コックニーなまりに近づけて訳している。ベッキーは、セーラが、隣の家の紳士が実は父親の友人で、セーラを探し回っていた、ということがわかり、その家にひきとられ、インドの水夫 Ram Dass から Missee Sahib と呼ばれるが、ベッキーもセーラの「the attendant of missee sahib」（菊池「お嬢様のお付き」伊藤「お嬢様の侍女」、川端・野上「お嬢様の侍女」畔柳「お嬢様の付き人」として、使用人の中でもレディに使える身分へと上昇する。

宗意和代は「翻訳の正体」<sup>22</sup>のなかで、「小公女」をとりあげ、Business woman（ミンチン先生）と Working woman（パン屋のおばさん）の対比が翻訳によっては消えていることが指摘されている。

また、セーラは境遇が変わったとき、勉強を続けることが困難になり、「I shall be like poor Becky. I wonder if I could quite forget and begin to drop my h's and not remember that Henry the Eighth had six wives」と、「H」の音を落とす、コックニーなまりをセーラが拒否する箇所を指し、「この「h」の音」に対する拒絶はセーラの、そして著者バーネットを含む中産階級の意識である」と意味付けている。

“Sara Crew”から引き継がれたこの一風変わった少女は A Little Princess の翻訳で

みせるもう一つ面に注意しておきたい。Chapter 8 In the Attic は、いかにセーラが試験に耐えるかが書かれた読ませどころである。セーラが万事に有能であることは、次のように書かれている。「She could be made more useful as a sort of little superior errand girl and maid of all work. An ordinary errand boy would not have been so clever and reliable.」(…サアラは…走り使ひか女中として役に立つだけであつた。普通の少年の走り使ひよりはサアラのほうが、よく気がつくし、ずっと信頼出来るのであつた。…伊藤訳)「普通の少年の走り使ひ」とは、Hall Boy という皿洗い女中に匹敵する使用人の少年をさすかと思われる。セーラはその賢さのために、ホール・ボーイがするような仕事も請け負う。<sup>23</sup>(菊池訳には少年のことはでてこない)

また、次の箇所には、セーラの空想は、プリンセスになることのみでないことを示している。

“Soldiers don’t complain” She would say between her small, shut teeth. “I am going to do it ; I will pretend this is part of a war”

伊藤整が、「小公女」の翻訳刊行にあたって、「序」として、「こんなに面白くつて、可哀さうで、勇ましくつて、人の心の美しさを書いたお話は、なかなかほかには求められません…」と述べた「勇ましい」場面の一つがこれである。

「軍人は愚痴なんかこぼさない。」セーラは歯をくひしばりながらいふのでした。「私だって、愚痴なんかいふものか。これは私、戦争の一つだっていふつもりなのだから。」(菊池訳)

「兵隊さんは愚痴なんか言ひやしないわ」とサアラは小さな歯をくひしばつて言つた。「私だつて言ひやしない。私はいま戦争のつもりでいるんだから」(伊藤訳)

「兵隊さんは、不平なんか言ひはしないわ」と、いつでもセーラは小さな歯をくひしばつて「わたしだって、言わないつもりよ。いまは戦争しているつもりなんですもの」(川端・野上訳)

22 「国際日本学」文部省21世紀COEプログラム採択日本発信の国際日本学の構築研究成果報告集 2011年9月収録。なお、同著者には「セーラの考察」(法政大学大学院紀要、2010年10月)、および、博士論文「翻訳の可能性：『小公女』からロマンス小説へ」(法政大学機関リポトリジ、2015年3月24日)があり、WEB上で公開されている。拙稿成立以前に本文に示した文献および「博士学位論文論文内容の要旨および審査結果の要旨：『翻訳の可能性—『小公女』からロマンス小説へ—」(主査田中優子)を読んでいたら、「セーラの考察」と博士論文そのものは未読であった。取り急ぎ未読のものを読み、本稿に取り入れた。特に博士論文第2節の『小公女』における階級分析は、引用した文献の発展のうえにあり、教えられるところが多かった。又、ハーレクインロマンスまで視野に入れたロマンス小説と「小公女」との関係づけは興味深く、参考になったことを申しさえる。

23 「メイドと執事の文化誌」シャーン・エヴァンズ著、村上リコ訳、原書房、2012年10月、原著2011年

野上・川端訳は、戦後の少年少女向け文学叢書、とりわけ翻訳文学発行の機運のなかにあり、「もう戦わなくていい時代」の女の子らしさがうかがえる言葉使いを前面に出しているが、原文の持ち味からすれば、菊池、伊藤訳のほうがセーラの主体性に即している。はたして川端・野上訳ににじみでるこの女の子らしさは、「戦後仕様の女らしさ」<sup>24</sup>（超智博美）と結託しないか、懸念される。川端有子は、すでに引用した論文<sup>25</sup>で、ポーア戦争（1889～1902）を「小公女」の背景に見ている。「南アフリカのヨーロッパ人種が大英帝国のヘゲモニーに抵抗した」、という事実は「国家的アイデンティティ・クライシス」を招き、「女性性は帝国を保持する重要な役割を与えられた。…すなわち、帝国の価値観を守る精神的導き手、傷ついた国家アイデンティティの癒し手であると同時に、イギリス人の人種の純粋性を守る生産者、帝国のレディ。…」川端の読みでは、アングロ・インディアンとしてのセーラの他者性は、最終的には「帝国」の価値観、女性ジェンダーの枠におさまってしまった、ということになるが、植民地インドがえりの少女は、想像のなかでマリー・アントワネットに同化するだけでなく劣悪な環境においては、兵士にもなる。想像の余地もない状況の下ではジェンダーも転換しうるのだ。セーラの Queerness は、インドの紳士とカリスフォード家の一員となっても、インドがえりであることをめずらしがられ、彼らにとっても他者性は物語の終盤までつづく。セーラははたして「帝国」に全面的に帰属しているだろうか、という疑問は残る。

### おわりに

若松訳「セイラ・クルーの話。」からセーラの強い、意志的な視線に注目したのは、目黒強だった。

「小公女」でも、セーラの視線のみならず、ミンチン先生やアーメンガードにも描写がいきわたり、酒井晶代は「原作の魅力のひとつは、この視線のドラマにある」というほどである。<sup>26</sup> 酒井によれば「小公女」の再話化（昭和2年奥野庄太郎、「小公女」中文館書店、昭和11年水島あやめ「名作物語 小公女」（「少女倶楽部」、14年水島あやめ「小公女」大日本雄弁会講談社）になると、「視線の表現の後退と涙ぐむ場面の増加」が前景化し、挿絵においては、「伏し目がちの少女」となるとも指摘される。

“Sara Crew”に挿絵を描いたレジナルド・B・バーチは、セーラがミンチン先生と対等に視線を合わせているのに対し、「少女倶楽部」（昭和11年、路谷虹児画）ではミンチン先生がセーラを怒鳴りつける場面で、セーラは見降ろされ、おびえている。伊藤整訳“A Little Princess”の挿絵には、セーラが乞食の女の子にパンを与える場

24 「戦後少女の本棚—第二次世界大戦後の文化占領と翻訳文学」（ジェンダー研究のフロンティア 5 作品社、2008年2月 p.100）

25 注18 川端論文

26 「挿絵に見る『小公女』受容」—1945年まで 研究「子どもと文化」（9）2002年7月



面があるが、ピファードの原画では、セーラは背筋を伸ばして、パンを差し出しており、どうみても、セーラのクラス意識は「さしだす」というよりは、「施す」側のそれとして表れている。昭和14年講談社版、加藤まさをの装丁では、同じ場面でも、セーラが腰を屈めて優しくパンを手渡しており、慈愛あふれる少女像である。「小公女」受容の過程でこうした改変なり、読み替えが起こることを止めることはできないし、それぞれの再話にそのつど立ち上がるコンテクストをみていくことが、少女文化研究には必要である。「小公女」はテレビ化1本（1986年）、映画化はハリウッドで、1917年、1939年、1995年と3回なされている。日本製アニメーションは海外に輸出されていることも酒井氏の論文から知ったが、再話化、視覚化のなかで保守的、メロドラマ的傾向を増す「小公女」である。

筆者は、原著と、それと関係する原画の図像的意味を、さらに詳しく検討することを次の課題としたい。原画が物語る後期ビクトリア朝文化のインテリア、大人や子供服の流行、ふるまいなど考察すべき点は多い。そのうえで100年以上にわたって受容されていく「小公女」とは、何か？ セーラとはだれか？ そして、だれがどのようなメディアで「小公女」を読む／見るのか？ 今後もうこうした問いが残されている。

本論は、2017年9月E A J S第15回国際学会（リスボン大学）での口頭発表に基づく。発表タイトルは Transformation of “Queer” (the otherness in) Little Princess : Transition of Shokojō from Wakamatsu Shizuko to Itoh Sei

本稿は、科研研究課題「服飾からみる近代日本の生成—ハイカラと上品」（2017年～2020年）の助成を受けた。

〈たねだ わかこ／本学教授〉